

『国際雑誌』の試みと挫折

ブランショたちの「来るべき雑誌」

佐藤（平岩）典子

はじめに

アルジェリア戦争における戦務不服従の兵士を擁護する〈121人宣言〉（1960年9月）の起草には、モーリス・ブランショが大きく関わったとされる。しかしこの〈宣言〉が世間の耳目を集めた最大の理由は、良くも悪くも当時の知的権威であったジャン＝ポール・サルトルが署名に加わったことにあった。そしてブランショは〈宣言〉から3ヵ月後の12月2日、再びサルトルに「新たな組織」への参加を求めている。

私がしばしば言うべきだったのに言わなかったこと、そして心の中でいつも考えていたことを、あなたは思い出させてくれました。〈宣言〉は、何かの始まりでなければ本当の意味を持つことはない、と。 […] もしも我々がそれぞれに予感している変化を、しっかりと曖昧さなしに表現しようとするのならば、またもしもその変化を、その流動的な存在において、その新たな真実において、現実化し深化させようとするのならば、それは新たな組織を出発点にすることによってのみ可能であろうと思います¹。

〈121人宣言〉が捲き起こした知識人たちの動きを一過性でなく継続的なものへつなげていく手段として、ブランショをはじめとするフランスの作家グループが発案したのは『ラ・ルヴュ・アンテルナシオナル（国際雑誌）』である。計画に実際参加したのはフランスのほかイタリアとドイツのみであったが、アメリカやイギリスなどにも参加を打診する手紙が送られている。結果から言えば、この雑誌はいわばお流れとなり、刊行には至らなかった。

¹ Lettre de Maurice Blanchot à Jean-Paul Sartre du 2 décembre 1960, *Lignes*, n° 11, septembre 1990, p. 219. この『リーニュ』誌1990年9月第11号に掲載された『国際雑誌』に関する書簡や資料について、以下の脚注では *Lignes*、『イル・メナボ』誌1964年第7号に発表されたテキストについては *Il Menabò* とのみ記し、頁数を添える。なお以下の引用文は私訳を試みたが、ブランショについては安原伸一朗氏の訳文を参考にした箇所もある。『ブランショ政治論集 1958-1993』（安原・西山・郷原訳）、月曜社、2005年（ここの引用は60-61頁）。

しかし〈121人宣言〉に続く活動が、なぜ「国際」でなければならなかったのか、なぜ「雑誌」でなければならなかったのか。本稿では、主に『リーニュ』誌に掲載された資料（『準備文書²⁾』）や数多くの書簡から、この『国際雑誌』の計画とその挫折の軌跡をたどる。

なおこの雑誌のタイトルは結局正式には決まらないままだった³⁾。原語のまま『ラ・ルヴュ・アンテルナショナル』と呼ばれることが多いが、本稿中では便宜上『国際雑誌』と呼ぶ。

ここで『国際雑誌』の計画を、時系列に沿って簡単にたどっておこう⁴⁾。

サルトル宛に手紙が書かれた後⁵⁾、1961年夏までの半年間に、各国の作家たちに『国際雑誌』計画への参加が打診され、また参加者の一部によって『準備文書』が書かれている。イギリス・アメリカからの参加は得られなかったものの、ここまでは比較的順調に計画が進んでいたように見える。

雲行きが怪しくなったのは、同年8月13日、ベルリンの壁の建設以降である。東西冷戦を象徴するこの壁は、ドイツの作家たちのあいだに大きな動揺を生んだ。ドイツ代表の役割を務めていたハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーはノルウェーに住居を移し、彼らを直接まとめることが困難になった。翌1962年7月にはウーヴェ・ヨーンゾンがドイツの代表になったが、彼はどうやら『準備文書』に目を通していなかったらしい⁶⁾。フランス人が提案し、イタリア人もある程度の理解を示していた雑誌の方式について、彼は全

²⁾ ブランショ、ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー、レシエク・コワコフスキ、ディオニス・マスコロ、エリオ・ヴィットリーニ、ルイ＝ルネ・デ・フォレ、フランチェスコ・レオネッティの7人が綴った『国際雑誌』の構想文書のことを以下で『準備文書』と呼ぶ。公表目的で書かれたものではなく、計画を参加者に説明する際に添付された。Lignes, pp. 179-216.

³⁾ 『イル・メナボ』誌の見開きには、大きく「ガリヴァー」と手書き風に記され、その下に「インテルナツィオナーレ01」という小さな活字が添えられている。

⁴⁾ より詳しい経緯の説明は、クリストフ・ビダンの記述を参照。Christophe Bident, *Maurice Blanchot : partenaire invisible*, Seyssel, Champ Vallon, 1998, pp. 403-417.

⁵⁾ サルトルはこの計画に参加しなかった。フランスの主なメンバーは、ブランショの他にディオニス・マスコロ、ロベール・アンテルム、ルイ＝ルネ・デ・フォレ、それに後から加わったロラン・バルトである。

⁶⁾ 1963年晩冬になってようやく、ブランショからヨーンゾンに『準備文書』のドイツ語訳が送られている。「このテキストは、私が思うに、あなた方にフランス語でお渡しした際には時間がなくて、ズーアカンプ社が翻訳をしてくれなかったのでしょう。それであなたはご存じなかったのかもしれませんが(Lignes, lettre de M. Blanchot à Uwe Johnson, sans date (entre le 1^{er} février et le 5 mars 1963), p. 283.)」

く理解を示さなかった⁷。

その間にフランス側でも、当初出版を約束してくれていたジュリヤール社の代わりにガリマール社が興味を示したものの⁸、費用の点で折り合いがつかず⁹、再びジュリヤール社が引き受けることになった¹⁰。

ヨーンゾンはフランス側の出版社についてのこうした経緯をも容認せず、憤然として計画の放棄を申し出た¹¹。1963年1月中旬には、チューリヒに3カ国の作家たちが集まって討議を行ったが、却ってお互いの立場の違いが鮮明になるばかりであった。ドイツ人たちはフランスグループの姿勢を哲学的・抽象的に過ぎるとして非難した。イタリアグループは、フランスとドイツのあいだの妥協線を探ろうとしたが¹²、首尾は芳しくなかった。

1963年4月には、パリのジュリヤール社内で再び会合が開かれ、集まったテキストについての討議と選択、配置が行われた。しかし結局ドイツはもとよりフランスでも出版にこぎつけることはできず¹³、1年後の1964年4月に

⁷ 雑誌の具体的形式については以下Ⅱ・Ⅲ章を参照。なお、ドイツグループの主要メンバーだったギュンター・グラスも、『準備文書』のことを知らないまま計画への参加を決めている。「偶然ですがあなたのお手紙を受け取ったとき、ギュンター・グラスがパリにいました。[...]あなた[エンツェンスベルガー]が、彼にいろいろなテキスト——ブランショ、ヴィットリーニ、あなたご自身等のテキスト[すなわち『準備文書』]を渡して下さっていなかったことを残念に思います(Lignes, lettre de Dionys Mascolo à Hans Magnus Enzensberger du 26 septembre 1961, p. 235.)」

⁸ 1961年9月にはガリマール社との契約が進行中であった。「結局ガリマールが、フランスでの雑誌刊行に出資をしてくれることになりました(Lignes, lettre de D. Mascolo à H. M. Enzensberger du 26 septembre 1961, p. 237.)」

⁹ 「ごく短い手紙を書いて(喧嘩腰にならずに)、彼ら[ガリマール社]にこう言おう。『そちらが出版と流通の費用を出し、部屋も用意して下さい——大変結構なことです。ですから後は、最小限に切り詰めた編集の費用を出して下さいだけでよいのです。つまり、寄稿者や翻訳者への謝礼、秘書の給与、編集室の雑費、移動の費用といったものです[...]』とね(Lignes, lettre de M. Blanchot à D. Mascolo, sans date (jeudi (?) novembre 1962), pp. 257-258.)」

¹⁰ 1962年11月末か12月初めごろのことと思われる。「簡単に言うと、雑誌はガリマールではなくジュリヤールから出ることになりました。ガリマールからは、製作と流通の費用以上の保証を得ることができなかつたのです(Lignes, lettre de D. Mascolo à Michel Butor du 5 décembre 1962, p. 264.)」

¹¹ 「ヨーンゾンは、大丈夫だというデ・フォレの言葉を、ガリマール側の正式な保証だと解釈していたのです。そしてそんな保証は存在していなかったということが判明すると、計画を放棄することにしたのです。彼の性格にはそういう厳格なところがありますから、予測はできることでした(Lignes, lettre de H. M. Enzensberger à D. Mascolo du 10 décembre 1962, p. 267.)」

¹² Lignes, lettre de Francesco Leonetti à U. Johnson et Louis-René des Forêts du 21 novembre 1962, pp. 261-263.

¹³ マスコロは「実際上の理由で(pour des raisons pratiques)」とだけ説明している。Lignes, lettre de D. Mascolo à F. Leonetti du 28 juillet 1963, p. 293.

イタリアで『イル・メナボ』誌がそれらのテキストを掲載することで¹⁴、この試みは実質的に終わったものと見られる。

まず、この『国際雑誌』がどういう雑誌として計画されたのかを以下で見よう。

I 『国際雑誌』の新しさ——「全体的批評」

〈121 人宣言〉に引き続き連帯の活動として、ブランショたちが「雑誌」という形を選んだことは、それほど奇異には感じられない。ただ、1965 年春にイタリアグループが『国際雑誌』に代わる新たな可能性のひとつとして、共著という形で本を出すことを提案したが、フランスグループが断固拒否しているところから、「雑誌」という形式にはいくばくかの必然性があったようだ。ディオニス・マスコロが述べるその理由は次のようなものである。

本というのは、たとえ共著であっても性質として決定的で、閉じられた、厳かな性質を持つものです（それは常に「唯一の書」のようなものです）。本というのは雑誌とは別の読者（つまり読者の中の何か別のもの）に向けて書かれたものです。雑誌はうつろいやすく、続きに向かって開かれていますから、それを読むことは「終わりが無い」のです（雑誌を読むことは次号以下に続くだろうから）。つまり、「動き」を出すことができなくなってしまうのです（たとえば年間 3 冊の本が出されたとしても、それら 3 冊の本は同じ意味を持つことはできないでしょうし、我々書く方も年間 3 回出る雑誌を書くのと同じやり方で書くことはできません）。本と本のあいだには断絶があり、避けることができません（むしろ虚無というべきか）——ですから考察が本から本へ連続していくことも、前の本に対して次の本がこだますることも、不可能になるでしょう（でなければそのとき、それは本ではなく、何号かにわたる雑誌ということにまた戻ってしまいます）。あなたはそう思いませんか¹⁵？

「本」という形に納まったとたんに、書かれたテキストが硬直化し「動かない」ものになってしまう。「雑誌」の可動性・柔軟性こそが、フランスグループの要請を満たすものであった。これは、次章以下で触れるこの雑誌の構成形式にも通じる姿勢である。

¹⁴ 『イル・メナボ』誌は、パリの会合で合意を得た配置をほとんどそのまま、変更を加えずに再現しているという。Francesco Leonetti, « Una rivista internazionale », *Il Menabò*, p. IX.

¹⁵ *Lignes*, lettre de D. Mascolo à Elio Vittorini, sans date (mars 1965), p. 301. 下線は原文による。

では具体的にどのような雑誌が計画されていたのだろうか。もちろん既存の雑誌と同じようなものを作っても意味がない。『国際雑誌』の計画は、通常の雑誌とは全く趣を異にするものであった。

各号は実際、有意義な全体を構成しなくてはならないでしょう。そして、大概の雑誌がそうであるように、お互いに何の関係もないテキストの単なる並置にとどまるものであつてはなりません。しかしながら、唯一の主題を（例外なく）扱うような特集号を作ることも問題になりません。いろいろな主題に関連するいろいろな研究も、お互いのあいだにある種の間接的な関係を持ち、共通の思考を押しつけ、近似した射程距離を持つものとなりえます。それこそが追求すべきことなのです¹⁶。

取り扱われる主題は多様であり、またそのアプローチも多様である。それにもかかわらず「共通の思考」によって、それらが「有意義な全体」となることが可能であると思われたのである。同様の趣旨が述べられている文章として、サルトル宛の手紙から再び引用してみよう¹⁷。

文学的な美しい物語、美しい詩、政治的コメント、社会的民俗学的な種類のアンケート等が載っている雑誌は、たいして興味があるものとは思いません。そういうごたまぜは、曖昧で、真実も必然性も持たないものになってしまう危険が常にあるものです。私が考えるのはむしろ**全体的批評**の雑誌です。批評といっても、文学がその本来の意味において（テキストの助けも借りて）捉え直されるような批評であり、またうまく説明されることがあまりない科学的発見も、総体的な批評の俎上に乗せられることになります。また我々の世界のあらゆる構造、この世のあらゆる存在形式が、同じように吟味され、研究され、異議を唱えられることになるでしょう。ですからこの雑誌は、批評という言葉がグローバルであるという意味をも再発見するものであり、今日、まさに今日において、とても大きな重要性と行動の力を持つものとなるでしょう¹⁸。

つまり彼の構想した『国際雑誌』とは、文学作品の研究でもなければ政治思想の主張でもなく、各号ごとに特集テーマが決められることもなく、「世

¹⁶ *Lignes*, lettre de D. Mascolo à H. M. Enzensberger du 14 mars 1961, p. 223. 下線は原文による。

¹⁷ この時点（1960年12月）では、まだこの雑誌を「国際的」なものにするというヴィジョンは立てられていない。つまりブランショの構想はまず「雑誌」にあり、然るのちに「国際的」計画に発展したということになる。

¹⁸ *Lignes*, lettre de M. Blanchot à J.-P. Sartre du 2 décembre 1960, pp. 219-220. 下線は原文による。

界のあらゆる構造、この世のあらゆる存在形式」を対象に「全体的批評」を行う場としての雑誌である¹⁹。しかも、論考が漠然と並置されるのではなく、あらゆる事象が「同じように吟味され、研究され、異議を唱えられる」、そのスタンスの一致こそがこの雑誌の特徴であると考えられたのだ。しかし、専門家ではない文学者たちがそのような雑誌を、しかも「国際的」レベルで作ることが可能だろうか。

II 「国際的」ということ——「集団的エクリチュール」

ミシェル・シュリヤによれば、この雑誌を「国際的」にすることを発案したのはマスコロであった²⁰。後年マスコロは次のように回想している。

それ[『国際雑誌』の計画]は新たな種類の小さなインターナショナル[une petite internationale]の中核になるものでした。原則としていかなる政治的前提も排除して、おそらくは政治的なものの源泉にまで、さらに遡ろうとするものでした²¹。

女性形の『インターナショナル(L'Internationale)』はパリ・コミューンの際に作詞作曲された革命歌(一時期はソ連国歌にもなった)のタイトルであり、また一般に社会主義運動の国際組織を指す名詞でもある。上の文章からは、マスコロがこの計画を一種の「作家インターナショナル」として位置づけていたことがうかがえる。むしろ『国際雑誌』は非政治的な雑誌として構想されたものであるが、「思考の共産主義²²」的着想を受け入れる素地が、各国知識人たちの側にあったことも事実であろう。『国際雑誌』の計画に同意を示すポーランドのレシェク・コワコフスキが、印象的な言葉を残している。

寄稿者たちの共同体は、理論的というよりむしろ遺伝的なものである。さまざまな国において相当数の人々に共通の知的態度というものが存在する。彼らがそれぞれ別々にではあれ、似たような教育を受け、似たような経験をしてきているところから、この共通の知的態度が生まれたのである。[...] 政治的な宣

¹⁹ マスコロからリチャード・シーヴァーに宛てた手紙にも、ほぼ同様の記述がある。
Lignes, lettre de D. Mascolo à Richard Seaver du 23 février 1961, p. 221.

²⁰ Michel Surya, « Présentation du projet de *Revue internationale* », *Lignes*, p. 165.

²¹ Dionys Mascolo, *Entêtements*, Benoît Jacob, 2004, p. 139.

²² *Ibid.*, p. 132. 同書は1993年に出版された『思考の共産主義を求めて』を改題したものである。D. Mascolo, *À la recherche d'un communisme de pensée*, Fourbis, 1993.

言においてこの共同体を表現することは無益である²³。

国家によって戦地へ送られた兵士の不服従を支持する〈121 人宣言〉に、各国の知識人たちから寄せられた反響は、政治的イデオロギーによるものではなく、第二次大戦とファシズムの恐怖、そして東西の冷戦という時代背景の共有によるものであっただろう。どの国でも、戦争の記憶とその残した悲劇は、権力によって個人の自由が圧迫されることに対する鋭い皮膚感覚を人々に与えた。コワコフスキのいう「遺伝的」共同体とは、経験の共有によっていわば自然発生的に生まれたものなのである。

ところがブランショは、「国際性」についてややニュアンスの異なる定義を与えている。

国際的な雑誌、というからには本質的なやり方で国際的でなければならない。単に多国籍というのではなく、抽象的な普遍性という意味での普遍的なものであるだけでも足りない。それでは種々の問題において、漠然として空虚な同一性しか捉え得ない。そうではなく、それぞれの国の言語という限定の中で、またそれぞれの国の背景の中で提示されるとおりの問題、文学・哲学・政治・社会の諸問題を共通なものとするのである。そのためには各人が、自分自身の問題についての所有や眼差しといった排他的な権利を捨て、これらの諸問題が他のすべての人々に属するものであるということを受け入れ、そしてそれらを共通の見地のもとに考察することを受け入れる、という前提に立たなければならない²⁴。

このようにブランショは「国際性」を、何よりも「自分の属する国」という呪縛を断ち切り、他国の問題を全員が共有し考察する作業において得られるものであると考える。こうした作業は「集団的エクリチュール」と呼ばれる方式——つまり、文章が一個人に帰属することを避け、「非人称化」するために複数の人間が徹底的に作成に関わっていく——にほかならない。こうした方式が〈121 人宣言〉の起草に始まり²⁵、後年の 68 年 5 月へと続くブランショの思考活動の中で、ひとつの理想であったことは夙に指摘されている²⁶。『国際雑誌』もまたそのような作業を行う場として構想されていた。

²³ *Lignes*, texte de Leszek Kolakowski, « Sur le caractère international de la revue », p. 196.

²⁴ *Lignes*, texte de M. Blanchot, « (La gravité du projet...) », p. 181.

²⁵ 〈121 人宣言〉における企ては「匿名の共同体」による「非人称の力」の行使であると表現されていた。*Lignes*, lettre de M. Blanchot à J.-P. Sartre du 2 décembre 1960, p. 218.

²⁶ 安原伸一郎、「文学の力——シャルル・ド・ゴールに反対するブランショ」、前掲『ブランショ政治論集 1958-1993』、112-123 頁。

つまりコワコフスキのいう「国際性」は、「遺伝的」にあらかじめ与えられたものであるのに対し、ブランショのいう「国際性」は、各自性の排除と徹底的な「集团的」共同作業によって、獲得されるべきものである。

世界初の宇宙飛行士ガガーリンを論じた「宇宙空間の征服²⁷」に、ブランショは土地という束縛から自由になった人間への希望を述べている。

人間が宇宙空間の人間になったとき、一瞬ではあれ決定的に感じられたこと、それは土地と縁を切ったという事実だ。人間が、原則的に、あらゆる地平線の外に出て、ほぼ均質な空間の絶対の中に存在していたのだ。[...]「外」との関係が根本的に変化したわけではない、現象学的に変化したのだ。[...]確かに技術は危険だが、《土地の霊》ほどに危険ではない。[...]真理は遊牧民なのだ²⁸。

ガガーリンが宇宙へ飛び立ったのは1961年4月、まさに『国際雑誌』の計画が練られている最中であつたと思われる²⁹。つまりこの計画の参加者には、地上を離れた宇宙飛行士のように、特定の「自分の国」への帰属を捨てて「ほぼ均質な空間」の「遊牧民」になること——つまり「非人称化」することが要請されていたのである³⁰。《準備文書》中のマスコロの記述を見ても³¹、各自の「土地の霊」を離れることは、少なくともフランスグループにとっては重要な関心事であつたことがわかる。そしてさらに、テキストの配置についても、各国による入念な討議を経て決定されなければならないという³²。し

²⁷ M. Blanchot, « La conquista dello spazio », *Il Menabò*, pp. 10-13.

²⁸ ここでは『イル・メナボ』誌に掲載された文章からではなく、《準備文書》中の記述を引用した。Lignes, texte de M. Blanchot, « Cours des choses », p. 189.

²⁹ 《準備文書》末尾には「61年7-8月」と記されている。Lignes, p. 216.

³⁰ 「雑誌は、集团的で創造的な[...]作品でもありうる。その雑誌が存在するという事実自体によって、参加者一人一人は、自分自身の道を多少先に進む、そしてまたおそらくは、独りであればたどつたであろう道とは多少異なる道へと導かれることになる。各人が、自分が作者ではない主張、また自分だけのものではもはやない探求に、責任を負うことになるし、またもともと彼自身によって知つたものではない知識を保証することになる。それが集团的可能性としての雑誌の意味である(Lignes, texte de M. Blanchot, « (La gravité du projet...) », p. 181.)」

³¹ 「この計画が集团的というのは、本質上、国際的レベルで集团的ということである。個人各自に求められた超越の努力と同じものが、各国グループの段階でも遂行されなくてはならない。文学、哲学、政治、社会の諸問題を共有することによって、[...]それらの問題が他のすべての国にも属するものであることを各国が認めるのである。[...] こうして、この雑誌が単なる多国籍（いろいろな出自のテキストの並置）になるのを避けることができるのである(Lignes, texte de D. Mascolo, p. 200.)」下線は原文による。

³² 「各国の編集委員会は[...]この雑誌の各号について全般的な構造を合同で決めな

かし、まだ通信手段の発達していない50年近く前のことでもあり、そのような濃密な作業を国際レベルで行うことは、実際には極めて困難だったのではないだろうか。《準備文書》の段階で、このことをいささかなりとも懸念していたのはデ・フォレただ一人だった³³。

もし、雑誌の配置にある種の柔軟性を保つために、その構造をあらかじめ決めておくつもりがないとしたら、各号の構成を行う前にそれぞれの編集委員会のあいだで前もって合意を得ておかなければならないということになる。そうすると重大な時間の無駄が生じてしまう。周知のように、定期的刊行ということは、雑誌が第一に守るべき規則である³⁴。

しかしこのような実践上の問題は、フランスグループの中ではほとんど顧慮されなかった。そして3年後の1964年、集まったテキストが『イル・メナボ』誌に掲載された際、レオネッティは各国グループの考える「国際性」について次のような指摘をしている。

フランス人たちにとっては、《集团的エクリチュール》を展開することが重要である（つまり各人のコンテクストへの参照は、明示的に示され検討される代わりに、暗黙上のものとどまる）。ドイツ人たちにとっては、用語、思想、方法論において各参加グループ間に合致があるのだから、《各自性》によっていろいろに接合された全体を作り上げることが重要である。イタリア人たちにとって、国際的レベルとは、いろいろと異なる文化間のつながりを承認することを通じて構成されるべきものである³⁵。

このように、イタリアとドイツの人々にとっての「国際性」は、各国の独自性を排除せずに共通点を探るものであり、むしろコワコフスキのいう「遺伝的」な「国際性」に近い。「集团的」作業によって各国の独自性やコンテクストを離れた「国際性」が獲得されるというフランスグループの主張は、他の2カ国の作家たちの考えと相容れないものだった。

くてはなりません (*Lignes*, lettre de D. Mascolo à H. M. Enzensberger du 14 mars 1961, p. 223.)

³³ また、この段階で《時流》とその「短形式」や「集团的エクリチュール」についてはっきりと語っているのは、フランスのメンバー（ブランショとマスコロ）だけであったことも見逃せない。つまりフランスグループの立てた構想では、こうした作業がきわめて重要視されていたにもかかわらず、イタリアとドイツの人々にはそれらが伝わっていなかったことになる。

³⁴ *Lignes*, texte de L.-R. des Forêts, « Structure », pp. 208-209.

³⁵ F. Leonetti, « Una rivista internazionale », *Il Menabò*, p. XI.

続いて次章では、その「国際性」を生み出す共同作業の場としてフランスグループから提示された《時流》欄について確認してみよう。

III 《時流》——「短形式」

フランスグループの考える『国際雑誌』は、さらに通常の雑誌と異なる特徴を持っていた。《時流 [le Cours des choses] 》と呼ばれる欄である³⁶。名称からすると、各国の新着情報を伝える小さなコーナーのようにも思えるが、この《時流》欄は「我々の世界のあらゆる構造、この世のあらゆる存在形式³⁷」を取り扱うという壮大な「全体的批評」の場として考えられていた。つまりそれはコーナーではなく、この雑誌の屋台骨である。そしてその他のテキスト（作品の抜粋や研究など）は《時流》の合間に組み込まれる形で掲載されるというのである。

《時流》を構成するテキストは、前章で述べたような「集団的」作業を経なければならないとされていた³⁸。そして《時流》のもうひとつの独自性は、次のようなブランショの定義によって明らかになる。

《時流》欄の意味はその構造と形式によって明らかにされ、宣言されなくてはならない。1) この欄は雑誌全体にわたって配置される。雑誌は、この欄とともに始まりとともに終わる。[...] 2) この欄においては短形式（現代音楽でこの語に与えられる意味において）を用いることになる。つまり、それぞれのテキストが短い（半ページから3、4ページ）というだけではなく、断片として構成されることになろう。それ自体において十全な意味を持つ必要は必ずしもなく、むしろより一般的な来るべき意味に向かって開かれ、あるいはまた本質的な不連続性の要請を受容するものでもあるのだ³⁹。

すなわち《時流》は、断片的な「短形式」のテキスト群によって構成される。それらのテキストは、各自がアプリオリに意味を持っているというわけ

³⁶ 「この雑誌に重要性を与え、その独自性となっているのは《時流》である。この欄は、この雑誌がなければ書こうなどとは思わなかったであろうテキストを何人かの作家に書かせ、彼ら自身の中で普通は使われていない部分を動かすためのものである(Lignes, texte de D. Mascolo, p. 203.)」

³⁷ 注18の引用部分を参照。

³⁸ 「これらの[《時流》を構成する]テキストは、[...] 前もって3カ国のグループによって提案され合同で考慮されてあったものでなくてはなりません(Lignes, lettre de L.-R. des Forêts à U. Johnson du 14 novembre 1962, p. 259.)」

³⁹ Lignes, texte de M. Blanchot, «Memorandum sur «le Cours des choses»», pp. 185-186. 下線は原文による。

ではない。「来るべき意味」は、それらの断片的テキストを組み合わせることで、相補的にもたらされるというのである⁴⁰。しかしこうした馴染みの薄い方式は、ドイツ人、特にウーヴェ・ヨーンゾンの首をかじげさせた。レオネッティによればヨーンゾンの反応は次のようなものであった。

ヨーンズンは 1 ミリメートルたりとも動かなかった。ドイツでは、エッセイ風の「短い」タイプの文章（あるいは断片。相補的に定義されるテキストという意味において）を書くことは不可能だというのだ。フランス人たちは彼らの「集団的エクリチュール」の要請を、「外部的には」短い文章、という風に説明した。しかしドイツではそのような文体的伝統に遡ることはできない、とヨーンズンは宣言した⁴¹。

もともと『国際雑誌』の計画について予備知識がまったくなければ、こうした反応はある意味常識的であるかもしれない。それほどにこの雑誌の方式——「集団的エクリチュール」と「短形式」——は斬新だったのだ。さらにヨーンゾンの無理解は「短形式」のみにとどまらなかった。彼はドイツのゾーアカンプ社との契約上、創刊号を翌 1963 年の 6 月 1 日には必ず出さなくてはならないと主張し、さらにデ・フォレにこう書き送る。

しかし《時評》欄に関しては、季刊誌としては、特に準備期間が長くなりすぎ、この欄のために書かれたテキストが、刊行時には時代遅れということになりはしないかと我々は危惧しています。3 ヶ月後にどの話題がまだアクチュアルなのか、予見するのは難しいですから。

それに 3 ヶ国のグループが、唯一のテーマについて或る号で意見を一致させることがどうやって可能なのか、それも我々にはわかりません。公衆の関心も、編集する者の関心も、3 つの国であまりに食い違っているように思われます。

ともかく国際会合の席には、各グループが創刊号のための出来上がったテキストを持ってくることを我々は望みます。構成と翻訳がすぐに始められるようにするためです⁴²。

⁴⁰ こうしたスタンスは、前章で触れた「集団的エクリチュール」と共に、1968 年 5 月に立ち上げられた〈学生作家行動委員会〉の活動をまとめた『コミテ』誌のあり方とほぼ同一であるといつてよい。西山雄二、『異議申し立てとしての文学——モーリス・ブランショにおける孤独、友愛、共同性』、御茶の水書房、2007 年、296-310 頁を参照。

⁴¹ F. Leonetti, « Una rivista internazionale », *Il Menabò*, pp. XII-XIII.

⁴² *Lignes*, lettre de U. Johnson à L.-R. des Forêts du 6 octobre 1962, p. 253.

こうしたそっけない反応にフランスグループは恐慌を来し⁴³、またレオネッティは両者に和解策を提示した⁴⁴。しかし各国の主張は噛み合わないまま、1963年1月にチューリヒで3カ国の会合が開かれた。この会合の様子について、再びレオネッティの記述を引こう。

「部外者」（ジャーナリスト）を全く入れずに、我々皆が話し合い、食事をし、会合の紫煙たちこめる部屋から外に散歩に出たりしている間に、まるで逆の、もっと複雑なことが起こっていた。それは何だったのだろうか？

到着時からすでに我々はとても疲れていた。いろいろな小さな困難、関係者同士の反感、友情めかした罵言、自分自身についての個人的な努力、そして自分にこう言い聞かせる必要もあった。[この雑誌は]権威ある企てとか、大きな発見とかいうものではなく、非妥協を旨とする「超少数派の」雑誌なのだ、と。作家たちが作る雑誌に意味があるのか？と各人が繰り返して自問していた⁴⁵。

この前後に交わされた手紙から、チューリヒでの話し合いの概要をまとめよう。ドイツグループの提案どおり、各国によって相当数のテキストが持ち寄られ、討議が行われたのだが、フランスグループが《時流》を「短形式」によって構成することに固執したのに対し、ドイツ人たち、特にヴァルター・ボーエリッヒはフランスグループの立場を「哲学的に過ぎる」として激しく非難した。ヴィットリーニはフランスグループが「短形式」に固執することによって「長形式」の可能性を排除していると指摘し、双方の歩み寄りを求めた。しかし、ブランショはヴィットリーニの提案に対して、あくまでも断片的なテキストによる《時流》欄の正当性を主張している。

我々が「短形式」あるいはより正確には「断片」と呼んでいるものは、本質的

⁴³ 「驚くべき [ヨーンゾンの] 手紙の訳の写しを急いで送ります。明らかに我々は最大の誤解に陥ってしまいました。ヨーンゾンがこの雑誌について抱いているらしい概念によれば、各国のグループが別々に、それぞれ独立したやり方で、別の地平に目を向けることもなく3分の1を担当するというのです、そして国際会議は結局技術上のすり合わせをするだけの場だというのです (*Lignes, lettre de M. Blanchot à D. Mascolo, sans date (mercredi (?) novembre 1962)*, p. 255.)」恐らくはこの手紙が書かれた翌日の木曜日に、再びマスコロへ手紙が書かれ、この問題の解決案が列挙されているところを見ても (*Lignes, lettre de M. Blanchot à D. Mascolo, sans date (jeudi (?) novembre 1962)*, p. 257.)、ブランショがヨーンゾンの無理解に驚愕し心を痛めていることが見て取れる。

⁴⁴ *Lignes, lettre de F. Leonetti à U. Johnson et L.-R. des Forêts du 21 novembre 1962*, pp. 261-264.

⁴⁵ F. Leonetti, « Una rivista internazionale », *Il Menabò*, p. XI.

に次のような思想につながるものです。1) 各テキストは、それ自体においてすべての意味を持つものではなく、断片的な一つの単位でしかない。その意味は他のすべての断片との関係しだいで決まる。2) ゆえに、その意味は置かれているテキストの中で、いったん決まったら動かないものではなく、テキストの総体が構成されるやり方によって変わる。つまり、これらのいろいろな断片（というか複数的な諸単位）の配置と組み合わせを決定する操作の規則によって変わってくる（テキストそれぞれがこの世に唯一のものであり、貧しいにせよ豊かにせよ唯一の意味を持つものであるかのように読み取った、ということがポーエリッヒの、また時にはあなた [ヴィットリーニ] の誤りの原因です。これらのテキストの意味は、実はいまだ来るべきものであり、あなた方 [イタリア人たち] のテキストやドイツ人たちのテキストによって決まるもの、とりわけ全体の構造によって決まるものなのです。）3) 「断片」は種々の考察の複数性に表現を与えるという必要性につながる。つまり、この多様な複数性によって、事物や世界の可能性の複数的な多数性に到達する必要性につながっているのです。しかし、この雑誌は非形式の中に拡散する危険性はありません。これらのいろいろなテキストの多様性が、全体の計画において構成され連結するのでなければ、そういう危険性もあるでしょうけれど⁴⁶。

つまり、各テキストを「断片」として扱い、それらの配置によって事物の多様性・複数性を表現しようというのが、《時流》欄に寄せたブランシヨの目論見だったのである。上の説明は至極明快ではあるが、やはりドイツ人の理解は得られず、またその厳格さはイタリア人の意に染まないものだった。それでもブランシヨが「短形式」にこだわり続けるには、どのような理由があったのだろうか。

IV マラルメ、ブーレーズ——そしてブランシヨ

ブランシヨは《準備文書》中で「この欄においては短形式（現代音楽でこの語に与えられる意味において）を用いることになる」と述べている⁴⁷。つまり、『国際雑誌』計画の頓挫を招いた一因ともいえる「短形式」は、現代音楽との関係において考察されるべきものなのである。もちろん現代音楽は《時流》欄で取り扱うべきテーマのひとつと考えられていた。

ブーレーズとマラルメ。『プリ・スロン・プリ』。ドナウエッセンゲンにおけるブーレーズの講演で、彼は詩-音楽の非両立性を示した。この非両立性から

⁴⁶ *Lignes, lettre de M. Blanchot à E. Vittorini du 8 février 1963, p. 277.*

⁴⁷ 注 39 の引用部分を参照。ここでの下線は引用者による。

出発してこそ、両者の出会いが可能になる。そして、この出会いの場所は、言葉上、韻律上、構成技法上の構造と、その音楽的等価物の中に見出せるとブーレーズは考える。すべての困難は、等価物、という言葉の中にあるのだ⁴⁸。

ドナウエッシンゲンでの当該講演がどの時点で行われたのか、またブランショがどのような形でその講演に接したのかはわからない⁴⁹。しかし英語のままの『ワーク・イン・プログレス [Work in Progress]』が『国際雑誌』のタイトル案として一時かなり有力視されていたことを見ても⁵⁰、当時既に現代音楽界の旗手であったピエール・ブーレーズに相当な関心が寄せられていたことはほぼ間違いない。よく知られているように、ブーレーズは自らの全作品を「ワーク・イン・プログレス（進行中の作品）」と呼び、何十年にもわたって改訂を続けているのである。また、1961年初夏にミシェル・ビュートルが『エクスプレス』誌に寄せたブーレーズ論も⁵¹、『準備文書』を執筆中のブランショの目におそらく触れたことであろう。以下で、1960年前後のブーレーズとマラルメの関わりについて簡単にまとめてみよう。

作曲家ピエール・ブーレーズの名は〈121人宣言〉の署名者の中にも見え、その数年前から何度か『新フランス評論 (NRF)』誌にも現代音楽についての論考を発表するなど、論客としても知られていた。特に有名なのは、1957年秋に発表された「骰子」である⁵²。不確定性を追求するジョン・ケージと袂

⁴⁸ *Lignes, texte de M. Blanchot, « Cours des choses », p. 190.*

⁴⁹ 『プリ・スロン・プリ』は1957年から数十年にわたって改変され続けてきたブーレーズの代表作のひとつである。『国際雑誌』計画よりも以前にドナウエッシンゲンで『プリ・スロン・プリ』が演奏されたのは1959年10月17日であり、このとき「墓」の部分（未完成）が初演されているが、講演の有無は不明。なお、この作品における「等価物」の概念については、後年のインタビューでブーレーズ自身のはっきりと説明している。Pierre Boulez, *Par volonté et par hasard : entretiens avec Célestin Deliége*, Seuil, 1975, pp. 122-124. 邦訳『意志と偶然——ドリエージュとの対話』（店村新次訳）、法政大学出版局、1977年、145-147頁。

⁵⁰ ヨーンソンはこのタイトル案にやや否定的な反応を示している。「雑誌の名前である『ワーク・イン・プログレス』ですが、これを翻訳すべきではないということには同意します。しかし、これでは準備中のテキストを定期的に刊行しているという風に思われるのではないかと心配しています(Lignes, lettre de U. Johnson à L.-R. des Forêts du 18 juillet 1962, p. 248.)」

⁵¹ Michel Butor, « Mallarmé selon Boulez », *L'Express*, le 22 juin 1961; repris dans *Répertoire II*, Minuit, 1964, pp. 243-251. 邦訳「ブーレーズによるマラルメ」（清水徹訳）、『エピステーメー』1976年8-9月号、8-20頁。訳者付記によれば、この論文は1961年5月15日にバーデンバーデンで行われた『プリ・スロン・プリ』の演奏を機に書かれたものであるという。

⁵² Pierre Boulez, « Aléa », *Nouvelle Revue Française*, 1^{er} novembre 1957, n° 59, pp. 839-857.

を分かち、「管理された偶然性 [le hasard dirigé]」の重要性を主張した論文として名高いが、この論文が同年初めに刊行されたマラルメの遺稿に大きな影響を受けて書かれたものであることは見逃せない。

《書物》のために遺された膨大な数の紙片を整理したジャック・シェレルの著書は⁵³、各方面で大きな反響を呼んだ。マラルメは唯一の《書物》によって森羅万象を表現することを目指したが、「《書物》は記念碑のように構築されなければならない（さもなければそれはただのアルバムだ）、しかし記念碑のように不動であってはならない⁵⁴」。その手段として選ばれたのがいわゆる「組み合わせ術」だった、とシェレルは言う。各紙片は「場所を変え、確かに何らかの順序に従ってではなく、置き換えの法則によって決定されたいくつかの別々の順序に従って読むことができる⁵⁵」。こうして「可動性」を導入することによって生まれる無数の組み合わせが《書物》を形成していくのである。

しかし膨大な数の組み合わせをすべて試してみるとしたら、天文学的な時間が必要になる。そこでマラルメには「文学的な直感と数字の計算」によって「管理された自由 [la liberté dirigée]⁵⁶」が必要となった。マラルメはもはや作者ではなく「匿名」の「操作者 [opérateur]」である。

既に1885年には計画をヴェルレーヌに打ち明けていたマラルメは、彼の「個人的作業は匿名であり、《テキスト》はそこで作者の声なしに、自分自身について語る」ものだと言っていた。原稿の中でも、匿名という決意は数多くのやり方で表明されている。《書物》は対象物である、〈私が責任者ではないという意味で——何某と署名されずに……〉。マラルメは〈読者〉でしかない。〈私は、外にいる。単なる読者だ……〉せいぜいのところ彼は〈最初の読者〉または〈最初の与えられた者〉だ⁵⁷。

シェレルの著書が出版される前年の1956年に、ブーレーズは「可動的」な作品として知られる『ピアノ・ソナタ第3番』の制作を既に始めていたが、直後にシェレルのこの著書を知り、深い感銘を受けたという⁵⁸。そして翌年から制作された『プリ・スロン・プリ』は、「マラルメの肖像」という副

⁵³ Jacques Scherer, *Le "Livre" de Mallarmé*, Gallimard, 1957.

⁵⁴ *Ibid.*, p. 56.

⁵⁵ *Ibid.*, p. 58.

⁵⁶ *Ibid.*, p. 88.

⁵⁷ *Ibid.*, pp. 69-70. () に囲まれた部分はマラルメの断片からの引用である。

⁵⁸ P. Boulez, *Par volonté et par hasard*, op. cit., p. 64. 邦訳 73 頁。

題を持ち、ブーレーズが愛読していたというマラルメの詩を題材にしている。

『ピアノ・ソナタ第3番』は「フォルマン」と呼ばれる5つの構成項の演奏の順番を演奏家に委ねるといった斬新な形式の曲であり⁵⁹、数年後にはウンベルト・エーコの『開かれた作品』に例として挙げられるほど話題を呼んだものであった⁶⁰。『プリ・スロン・プリ』は、それぞれ別に発表された5つの曲から成るが⁶¹、それぞれの楽譜には指揮者や演奏者の裁量に委ねられた部分が存在する⁶²。いずれも、断片的要素からの選択という作業を指揮者や演奏者に課することによって姿を変える「可動的」作品という意味で、マラルメ（とシェレール）の影響を強く受けていることがうかがえる。「管理された偶然性 [le hasard dirigé]」というブーレーズの主張は、マラルメに「管理された自由 [la liberté dirigée]」を見たシェレールから想を得たものであることは明らかであろう。

さて『国際雑誌』の計画に戻ろう。前章までで見たように、この雑誌は「集团的」作業によって「国際的（＝非人称的）」にされた「短形式」のテキストから成る《時流》欄を軸とするべきものであった。そしてこのような方式は、シェレールの提示したマラルメの《書物》の構想に酷似している⁶³。ブランショは、いわば「管理された非人称性」を目指していたのではないだろうか。ブランショの手紙からこの形式について述べた部分を引用してみよう。

⁵⁹ ただしこの5つのフォルマンのうち、楽譜の形で発表されたのは《トロープ》と《コンステラシオン・ミロワール》の2つのみである。ピエール・ブーレーズ（笠羽映子訳）、「ソナタよ、おまえは何を私にのぞむのか——『第三ソナタ』について」（『ユリイカ臨時増刊・総特集ステファヌ・マラルメ』1986年9月、376-394頁）の訳者付記を参照。

⁶⁰ Umberto Eco, *L'Œuvre ouverte*, Seuil, 1965 (coll. « Points Essais »), p. 16. イタリア語のオリジナルは1962年に出ている。

⁶¹ 順に『たまもの』『マラルメによる即興曲』1・2・3番、『墓』と題される5曲である。ただし、常に全曲が演奏されるとは限らないという。

⁶² しかし繰り返し行われた改訂の結果、こうした可動的部分は徐々に失われていき、確定的要素が増大しているという。白石美雪、「マラルメの光輝——ブーレーズの《プリ・スロン・プリ》とその周辺」、『ユリイカ』1995年6月号（「増頁特集ピエール・ブーレーズ」）、262-267頁。詳細についてはCD『プリ・スロン・プリ (Erato WPCS-11539)』ライナーノーツの同氏による解説を参照。

⁶³ 評論集『来るべき書物』（1959年）の題名にもなったマラルメ論「来るべき書物」は、当初はシェレールの著書の書評として1957年に2回に分けて発表された。M. Blanchot, « Ecce liber », *Nouvelle Revue Française*, 1^{er} octobre 1957, n° 58, pp. 726-740; « Livre à venir », *Nouvelle Revue Française*, 1^{er} novembre 1957, n° 59, pp. 917-931. なお、まさに偶然ではあるが後編の「来るべき書物」と同じ第59号に、ブーレーズの「骰子」が掲載されている。注52参照。

我々はこの形式にこだわっています、というのも […] これがもっとも本質的な理由です——その形式が、我々のものとなるべき決定的な任務に呼応するものであるように思われるからです。その任務とは、唯一その意味を真に決定する配置に従って並べられたさまざまな考察の複數性によって、世界の事物や世界の可能性の複數性を捉える、という任務です⁶⁴。

前章までで述べたように「全体的批評」の場として構想された『国際雑誌』は、唯一の視点からではなく、「複數性」において世界の事象を捉えることを目指していた。同様に、配置によって得られる複數の意味が、マラルメの膨大な紙片を《書物》に変える、とシェレールも言う。

可動的な紙片による《書物》の構造は、意味を多様化させる新しい莫大な可能性をもたらす。各紙片は、物質性においては一定の要素である。その材料である紙は、位置を変えたところで全く変化しない。しかしその紙の上に書かれた文字は、新たな配置によって、新たな価値をとりうる⁶⁵。

このように、『国際雑誌』とマラルメの《書物》は、もちろん内容はまったく異なるものの、形式の上でも、またその形式によって目指すところの「多様性」においても相通ずる。「全体的批評」の場として、『国際雑誌』を「短形式」によって構成することにこだわり続けるブランシヨの念頭にあったのは、断片の組み合わせによって可動的でありつつ、その総体は全世界を指し示す、というマラルメの《書物》だったのではないだろうか。ブランシヨは『来るべき書物』で『骰子一擲』に寄せてこう述べる。

『骰子一擲』が書物の未来を方向づけるのは、もっとも激しい散乱状態という方向であると同時に、より複雑な構造の発見によって限らない多様性をひとつに取り集めることが出来るような或る緊張という方向である。マラルメがヘーゲルのあとを継いで語っているように、精神とは「揮発性の散乱物」なのである。 […] つねに運動状態にありつねに散乱の極限にあるこの書物は、その散乱そのものにより、この書物に本質的な分裂に従って、つねに、あらゆる方向からひとつに集中されることにもなるだろう。この書物は、この分裂を消滅させるのではなく、それを出現させて保持するのであり、かくしてそこでおのれを成就するのである⁶⁶。

⁶⁴ *Lignes*, lettre de M. Blanchot à U. Johnson du 1^{er} février 1963, p. 271. 下線は原文による。

⁶⁵ J. Scherer, *op. cit.*, p. 85.

⁶⁶ M. Blanchot, *Livre à venir*, Gallimard, 1986 (coll. « Folio Essais »), pp. 319-320. 栗津則雄氏の訳文を借りた（『来るべき書物』、筑摩書房、1989年、335頁）。傍点は原

散乱しつつも、まさにその散乱において集中していく「来るべき《書物》」——この難解な概念は、「短形式」によって構成される『国際雑誌』の計画に色濃く反映され、具象化されようとしていたといえよう。

おわりに

ブランショは後年『国際雑誌』を「来るべき雑誌 [revue à venir] 」と形容し、その挫折の元凶はベルリンの壁にあったと回想している⁶⁷。たしかに東西ドイツの分裂は、最初の躓きの石のひとつではあった。しかし、それは唯一の原因だったろうか。

1963年1月のチューリヒでの話し合いの後、エンツェンスベルガーが指摘したことがひとつある。フランスグループが、この雑誌を購読することになる読者のことを忘れていているというのである。

君 [マスコロ] は非常に簡潔にこう宣言しました、公衆は神秘だ、と。私は全く同意できません。美しいけれど、とても危険な文です。もし公衆が神秘だとしたら、それは我々の欠陥です。誰に対して話しているのかを知らなくてはなりません。[...] チューリヒで君たちのうちの誰かが、たいへんまじめな顔で、マラルメふうの、純粋に美的な理由から、特大サイズの雑誌にすることが望ましいと発言しましたね。その結果、雑誌の値段が倍になっても——美的要請が満たされるためならば全くかまわない、と。その態度は私に深いショックを与えました。それは、完全に前マルクス主義的な、他者（すなわち読者、聴衆）の忘却であるように思えますし、この雑誌を読む必要がある人々に対する連帯の欠如です。私は、個人的に、それを容認することはできません。[...] フランスには、たいへん教養があつて洗練され、何でも読んでいて、相当の物質的余裕がある（雑誌の値段が5フランでも12フランでもかまわない）ような社会的知識人層が存在します。しかしドイツではそうではありません。[...] チューリヒで（「抽象」などという不器用な言葉を使って）指摘された「成層圏的」な、いささか特権階級的なやり方は、ここに起因するものです⁶⁸。

また同じくチューリヒの会合の後、ヴィットリーニはブランショにこう書き送っている。

訳文による。

⁶⁷ M. Blanchot, *Pour l'amitié*, Tours, Farrago, 2000, p. 28. 邦訳『友愛のために』（清水徹訳）、《リキエスタ》の会・トランスアート、2001年、25頁。

⁶⁸ *Lignes, lettre de H. M. Enzensberger à D. Mascolo du 25 février 1963*, pp. 279-280. 下線は原文による。

我々はそれぞれ別の町に離れて住んでいます。ときどき（平均して年に6回）2人で会うことがあります。3人で会うことはもっと稀です。そして全員が顔を揃えることは全くありません。つまり、我々のあいだには付き合いはない、作家から作家へのコミュニケーションなどは（手紙をやり取りする以外には）全くないということです。付き合いとかコミュニケーションとかいうのは、（それぞれ住んでいる町で）人々、つまり技術者、教師、商人、組合員、医者等とのあいだにあるものです。ですから、彼らと話す内容、彼らと話すときに使う言語が、我々の関心や作家としての言語を条件づけているのです⁶⁹。

エンツェンスベルガーとヴィットリーニがチューリヒで気づいたのは、全員パリ在住で「毎週集まっている⁷⁰」フランスと、各メンバーがそれぞれ別の都市に住んでいてめったに会わないドイツやイタリアとのあいだには、自ずから温度差があるということである。仲間うちで頻りに意見交換を続けていたフランスグループは知らず知らずのうちに、知識人だけに向けられた特権階級的なものとして、この雑誌を構想してしまっていたのかもしれない⁷¹。

もう一度、マラルメとブーレーズにことよせて考えてみよう。マラルメの《書物》における「操作者」は、朗読会におけるマラルメ自身の位置づけである。読まれた断片は、もはや作者のものでも朗読者のものでもない。マラルメはただ「操作者」として、一読者としてそこに立ち会うのである⁷²。ブーレーズもまた、指揮者が各楽器奏者との相互的なつながりを通じて演奏を組み立てていくという意味で、指揮者を「操作者」と呼びたい、と語っている⁷³。つまりこの両者において、「操作者」は、可動性の中で読者（あるいは聴衆）が道に迷わぬよう導きつつも、すべてをコントロールするわけではない、という中間的な役割を果たす者である。

一方『来るべき書物』で、ブランショは「操作者」の概念について次のように述べている。

⁶⁹ *Lignes*, lettre de E. Vittorini à M. Blanchot du 1^{er} mars 1963, p. 281. 下線は原文による。

⁷⁰ *Lignes*, lettre de M. Blanchot à E. Vittorini du 8 février 1963, p. 276.

⁷¹ この雑誌が一般読者ではなく「作家」を対象にしていることを示す箇所として、注36の一節を再び引こう。「この欄 [《時流》] は、この雑誌がなければ書こうなどとは思ひもしなかったであろうテキストを何人かの作家に書かせ、彼ら自身の中で普通は使われていない部分を動かすためのものである (*Lignes*, texte de D. Mascolo, p. 203.)」下線は引用者による。

⁷² J. Scherer, *op. cit.*, pp. 68-70. 注57の引用部分を参照。

⁷³ P. Boulez, *Par volonté et par hasard*, *op. cit.*, p. 103. 邦訳 121-122 頁。

この書物には媒介者が必要だ。それが、読むという行為なのである。ここに言う読む行為は、つねに著作をおのれの偶然的な個人性に近付けようとするそのらの読者の行う読書ではない。マラルメは、この本質的な読書の声となるだろう。作者として消滅し排除されるが、この消滅を通して、彼は、書物の、立現れながら消え去っている本質と関わるのだ。[...] マラルメは、読者を「操作者」(opérateur)と呼んでいる。読書は、詩と同様に、「操作」(opération)なのである。[...] 読むことは、切除であり、それは、おのれを切除することによっておのれを成就する働きなのである。おのれ自身と対決することによっておのれを証し、おのれを確立しながらおのれを中絶させる働きなのである⁷⁴。

下線部分にあるように、問題とされているのは一般読者による読書ではない。ブランショの言う読書すなわち「操作」とは、「おのれを切除する」という非人称的な行為を通じて《書物》の匿名性と共鳴するような、特権的なタイプの「読書」である。

それではマラルメの《書物》と同じように断片的要素から構成されるはずだった『国際雑誌』ではどうだろうか。ブランショが「集团的」作業にあくまでもこだわったのは、テキストの内容についてはもとより、その配置についても「匿名性＝非人称性」を導入するために他ならない。では、この国際会合こそが「操作者」ということになるだろうか。確かに《準備文書》で、ブランショはこの「集团的」作業を「それは作者と読者とを仲介する位置だ⁷⁵」と定義している。

しかし、もしテキストの配置があらかじめ定められていたとしたら、その雑誌が印刷されて読む人の手に届いたとき、それらのテキストのあいだには、もはや「可動性」や「複数性」は失われているのではないだろうか。そのとき、非人称的な「操作者」であったはずの国際会合は、皮肉にも「現代知性の粋を集めた絶対的権威」として受け取られかねないのではないだろうか。「操作者」たる作家たちの集团的作業によって、ブランショの言う「国際性(＝非人称性)」がたとえいったん獲得されたとしても、読者の手に渡ったときに、再び「土地の霊⁷⁶」が戻ってくる危険性は排除できないのだ。

『国際雑誌』の計画には、マラルメ的な「来るべき《書物》」に連なる壮

⁷⁴ M. Blanchot, *Livre à venir*, op. cit., pp. 330-331. 邦訳 345-346 頁。傍点は原訳文により、下線は引用者による。明らかな誤植のみ訂正した。

⁷⁵ *Lignes*, texte de M. Blanchot, « (La gravité du projet...) », p. 181.

⁷⁶ 注 28 の引用部分を参照。

大な夢が託されていたと考えられる。しかしフランスグループの構想は、きわめて理解を得にくい抽象的なものであった。しかもエンツェンスベルガーやヴィットリーニが気づいたように、一般読者への目配りをいささか欠いていた。「雑誌」という可動的形式にこだわる理由として「(現実の)読者」の存在を挙げたマスコロの手紙が⁷⁷、計画の初期ではなく、ほとんど望みの失われた最終段階(1965年3月)に書かれているということは、その意味で示唆的である⁷⁸。

⁷⁷ 注15の引用部分を参照。

⁷⁸ ただ、イタリアとフランスの作家たちはその時点でもなお、『国際雑誌』を「来るべき」ものと考えていた。同じ手紙で、マスコロはこう言う。「私は決して、この計画を決定的に諦めてしまうことはしません。[...] 私はいつの日か、この悲しみから抜け出すという希望を絶対に捨てはしません(Lignes, lettre de D. Mascolo à E. Vittorini, sans date (mars 1965), p. 300.)」下線は原文による。